

24. 乳癌 (stage I, II) 症例術後の経過観察——とくに骨シンチグラムによる再発率について——

井上 明美 今枝 孟義 飯沼 元
 鈴木 雅雄 広田 敬一 関 松蔵
 曾根 康博 土井 偉誉 (岐阜大・放)
 古田 智彦 (同・二外)

乳癌は骨転移が多く、術後の経過観察において骨転移の有無を調べることは臨床的に大きな意味がある。今回われわれは、昭和51年から61年までの10年間に骨シンチによる追跡を行った stage I, II の乳癌術後症例の骨転移率について検討した。

症例は stage I 39例, stage II 46例, 計85例である。骨転移率を stage 別, T因子, N因子, n因子ごとに検討したが、いずれも有意差は認められなかった。stage I, II の再発率は3年まででおおの 12.5% と 17.5%, 5年まででは、両者とも 22% であった。初発骨転移部位は、肋骨と胸椎に多かった。

25. ^{11}C -CGP₁₂₁₇₇ を用いた犬心筋ベータアドレナリン受容体のイン・ビボ解析

瀬戸 幹人 (金沢大・核)
 A Syrota (Service Hospitalier Frédéric Joliot
 du C.E.A. France)

フランス原子力委員会生物部門フレデリックジョリオ病院で開発された β -adrenoceptor antagonist である ^{11}C -CGP₁₂₁₇₇ のイン・ビボにおける特異的結合性を証明するために、犬を用いて基礎的 PET study を行った。Control kinetic study では radioligand 静注後約10分で心筋の ^{11}C -CGP 濃度はほぼ一定値となり約30分以上はその減少を認めず、一方血中濃度は数分内できわめて低値となり、心筋/血液濃度比は静注70分で6倍に達した。Displacement study では非標識 CGP 投与により心筋 radioligand 濃度は急速に低下、同調して CGP の薬理作用(心拍数の低下)を認めた。犬を用いた PET study で ^{11}C -CGP の K_d および犬心筋の B_{max} も求め、本リガンドは十分臨床応用可能な優れたリガンドと言える。

26. 出血シンチにおける ^{99m}Tc -RBC (in vivo) 標識率低下の原因についての検討

川合 宏彰 伊藤 圭一 金子 昌生
 (浜松医大・放)
 坂本 真次 山田謙太郎 (同・放部)

出血シンチにおける ^{99m}Tc -RBC の標識率低下の一誘因について輸血との関連性を in vitro 系で標識を行い、検討した。方法は輸血用に採血した血液を採血3日、1週間、2週間後に採血直後のヘパリン加新鮮血液と混合し、その混合割合を変え標識率を調べた。また採血2週間後の保存血と新鮮血液の血漿と血球を分離し、ヘマトクリットが40%になるように古血漿と新血球、新血漿と古血球を混合し標識率を調べた。結果、採血後1週間までは新鮮血液と混合しても標識率は低下しなかったが、2週間後の血液は混合により有意に標識率が低下した(89.4%から26%)。また、その原因の多くは旧血漿成分内にあることがわかった。ほかに大量輸血が原因で標識率が低下したと思われた1例を提示した。

27. 新しい腫瘍マーカーキット (SLX「オーツカ」) の使用経験

古川 雅一 金森 勇雄 奥村 恭巳
 樋口ちづ子 (大垣市民病院・放)
 中野 哲 武田 功 熊田 卓
 杉山 恵一 (同・消)
 佐々木常雄 (名古屋大・医短)

シアリル stage specific embryonic antigen (ssEA-1 抗原) は、各種腺癌の腫瘍マーカーとして注目される糖鎖抗原であり、この血中抗原を検出するシアリル LeX-i 抗原測定用キット (SLX「オーツカ」) の基礎的検討を行った。〔結果〕1) 標準曲線は再現性よく良好な曲線が得られた。2) 再現性、添加回収率、希釈試験はほぼ満足すべき値が得られた。3) Cut off value は false negative を少なくすることも考慮し 30 U/ml にした。4) 肺癌は 54.8% (17/31)、肝癌 52.4% (13/24)、卵巣癌 51.9% (14/27) の血清陽性率を示した。

以上のごとく、本法は新しい腫瘍マーカー測定用キットとして応用し得るものと考えられる。